

「リュウレン物語」

「講談師、見てきたように嘘をつき」と申しますが、ドキュメンタリーをベースに味付けしたもの、まあ映画で言えば、「この映画は実話に基づいたものです」と解説される、そのような代物と言っていいでしょう。

本日は中国人強制連行被害者劉連仁（リュウレン）さんを主人公とした物語を読ませていただきます。詩人茨木のり子さんの長編詩「りゅうれんれん物語」（朗読すれば1時間弱かかるらしい）と早乙女勝元さん劉連仁強制連行についてのドキュメント「徴用工の真実」この二つを使って脚本を構成してみました。

「落語を聞くとダメになる、講談を聴けばためになる」と講談師は手前勝手に思い込んでいるようであります。とはいいいましても私自身、講談について知識があるわけではなく、あくまでも講談のような感じで勝手に真似てみるというだけのことですが、20分そこそこの時間で読み終わります。

本来落語や講談で台本を配布することはありませんが、素人であり、うまく伝わらない可能性があるのをあえて台本を配布しましたので、読みながらお聞きいただければ幸いです。

昭和19年9月の或る朝のこと、リュウレンが攫われた。6尺もある偉丈夫が、鍬（クワ）を持たせたらこのあたり一番の百姓が、為すすべもなく攫われた。山東省の男どもは苛酷に使っても持ちがいい、このあたり一帯が「華人労務者内地移入に関する件」により労務者狩場となっていることなどリュウレンは知る由もなかった。

日本軍は手あたりしだい、バツタでも掴まえるように道々男たちをとらえ、数珠つなぎに連行する。リュウレンは胸が痛い。結婚したての若い妻、趙玉蘭（チャオユイラン）、初々しい前髪の妻は7ヶ月の身重だ。チャオユイランよ。チャオユイランよ。リュウレンは胸が痛い。たとえひと月、ふた月でも俺が居なかつたら、母とまだ幼い5人の兄弟はどうなる、家の畑は、一反二畝の畑の仕末はどうなってしまうんだ。

連行されながら通る村、通る町、戸をとざし門をしめ、死に絶えたよう、猫の仔一匹見当らぬ。戸の間から覗き見、怯えている者たち、「俺の顔を見覚えていたら伝えてくれろ。リュウレンは罨にかかって連れて行かれたと。妻チャオユイランに、チャオユイランに伝えてくれろ。」

一行八百人の男たちは、青島（チンタオ）の港へと追いたてられていった。暗い暗い貨物船の底、リュウレンは銃剣つきの監視のもとで指紋をとられ、終身奴隷として門司の港に着いた。6日の船旅、「没法子（メイファーズ）」、舟底の石炭の山によりかかり、八百人の男たち、家畜のように玄海灘を越えた。門司からは2日も汽車に乗せられた。それから更に4時間の船旅、着いたところは「ハコダテ」という町であった。男たちは1日かけて更に北へ、この世の終りのように陰気くさい、最果ての炭坑へと追いたてられていった。

10月末には雪が降り樹木が裂ける厳寒のなか、かれらは裸で入坑する。9人がかりで1日

にトロッコ 50 車分を掘るノルマ。棒クイ・鉄棒・ツルハシ・シャベル、殴られて殴られて、傷口に入った炭塵は刺青のように体を彩り爛れていった。それから男たちの逃亡につぐ逃亡が始った。雪の上の足跡を辿り連れもどされての目を掩うリンチ、仲間が生きながら殴り殺されてゆくのをじっと見ているしかない無能さに、リュウレンレンは何度震えが止まらなかったことだろう。

春が訪れ、空気にかぐわしさがまじり、やがて花も樹々もいつせいにひらく北海道の夏、逃げるのなら今だ！雪もきれいに消えている。リュウレンレンは誰にも計画を話さなかった。青島で全員暴動を起す計画も洩れてしまった。炭坑へ来てからも計画は何度も洩れた。煉瓦をしっかりと抱きしめて、夜明けの合図を待っていたこともあったのに。リュウレンレンは一人で逃げた。どこから。便所の汲取口から。汚物にまみれて這い出した。

山また山、峰また峰、野のニラをつまみ山白菜を食べ、毒茸にのたうち、けものと野鳥の声に脅え、猟師もこない山奥深くへと移動した。リュウレンレンは黙々と冬眠の準備を始めた。短い夏と秋は終わっていた。ふぶきはじめて空、捨てられたスコップを探してきて、穴を掘りぬき掘りぬいてゆく。昆布と馬鈴薯を貯えられるだけ貯えて雪穴のなかに身を閉じこめた。熊の親戚みてえなつらしてこの冬はやりすごそう。

彼の上にそれから十二年の歳月が流れていった。リュウレンレンにとっての生活は穴に入り、穴から出ることでしかなかった。深い雪におしつぶされず、冬を過す眠りの穴を注意深く探しながら、年ごとに移動した。ある秋のこと、栗ひろいにやってきた村の女にぼったり会った。女は鋭く一声叫び 折角の栗をまきちらし、まきちらし、這うように逃げた。リュウレンレンは小川に下りて澄んだ水を覗きこんだ。のび放題の乱れた髪、畑の小屋から失敬した女の着物を纏いつけ、妖怪めいてゆらいでいる。これが自分の姿か？自嘲といまいましさに火照った顔を秋の川の流れに浸し、虎のように乱暴に体を揺った。狼に会った。熊にも会った。兎や雉とも視線があった。かれらは少しも危害を加えず、リュウレンレンもまた獣を殺すにしのびなかった。恐いのは人間だ！

幾冬かの苦い経験のはて、皮の外套を手に入れた。セーターや毛糸の手袋も手に入れた。だが 1 年ごとに身の方は弱ってゆく。何年か経つと月日は数えられなくなり、家族の顔もおぼろになった。記憶と思考の世界からは絶縁された。獣のように生き、日本が海のなかの島であることさえも知らなかった。だが、リュウレンレンにはみずからを生かす智慧と体があった。惨憺たる月日を縫い、リュウレンレンの命は母国の大河のように悠々と流れた。しかしその智慧も体も限度にきたようにみえた。

厳しい或る冬の朝のこと、リュウレンレンはとうとう発見された。札幌に近い山中で日本人の猟師によって。凍傷にまみれた 6 尺ゆたかな見事な男が絶望的な表情を滲ませて「イダイ、イダイ」を連発する。「痛い」それはリュウレンレンの覚えていたたった一つの日本語だった。「どうやら中国人らしい」通報を受けて駆けつけた警官たちは遠慮がちに遠巻きにした。

リュウレンレンは訝しむ。何故ぶん殴らないのだろう。何故昔のように引きずっていか

ないのだろう。麓の雑貨屋で赤い林檎と煙草さえくれた。火にもあたらせてくれた。「不明白 (プーミンパイ)」「不明白 (プーミンパイ)」ワガラナイヨ、ワガラナイヨなにもかも。背広を着て中国語をしゃべる男がリュウレンレンを旅館に案内した。

リュウレンレンは背広を着た中国人がいるはずがないと思う。しかし「あなたの食べたいもの、注文していいんです。日本人はもう中国人をいじめないです」と中国語で語りかけてくる。リュウレンレンは熱いうどんを注文した。頬の赤い女中がうどんを運んできた。湯気の香りの中でリュウレンレンの固い心が初めてほんの少しほぐれた。「ひどく痛めつけられたものだ。」背広を着た中国人がまぶたを熱くしながら、一尺半のお下げ髪の男を眺めやった。

リュウレンレンにスパイの疑いがかかり、取り調べがあった。どこで働いていたのか、北海道の山々をどのように辿ったか、すべては朦朧と答を出せなかったリュウレンレン。札幌警察署の男は言った。「我々には予算がない。我々の管轄ではない。」札幌市役所の男は言った。「道庁の指示がないと何も手をつけるわけにはいかない」北海道庁の男は言った。「政府の指示がなければ何も手をつけるわけにはいかない」政府はリュウレンレンを「不法入国者」としてかたづけようとした。

このことを知った心ある日本人と中国人の手によって、リュウレンレンの記録調査がすみやかに行われた。労務者として強制連行された中国人の数は数万人、それらの名簿を辿り早く彼の身分を証すことだ。スパイの嫌疑すらかけられている彼のために、膨大な資料から針を見つけ出すような、日に夜をつぐ仕事が始った。「行方不明」「内地残留」「事故死亡」「病気死亡」たった一言でかたづけられている中国人の男たちの名前の列・列・列。

不屈の生命力をもって生き抜いたリュウレンレンの名が或る日、くつきりと炙出しのように浮んできた。「劉連仁、山東 (シャントン) 省諸城 (チュウチョン) 県第七区紫溝 (チャイコウ) の人、昭和 19 年 9 月北海道明治鉱業会社、昭和鉱業所で労働に従事、昭和 20 年無断逃亡。現在なお内地残留の見込み」残されていた数万人の男たちの名簿から、リュウレンレンが何者か明らかにされたのだ。

昭和 33 年 3 月リュウレンレンは雨にけむる東京についた。言いぬけばかりを考える官僚のくらげども。ぬらりくらりとした政府。罪もない、兵士でもない百姓をこんなひどい目にあわせた「華人労務者内地移入に関する件」！

外務省板垣アジア局長は「劉氏は契約に基づいて来日し、北海道の炭鉱で就労中、勝手に逃亡したものである」と衆議院外務委員会で答弁した。

岸信介総理は「政府としては当時の事情を明らかにするような資料はございませんし、それを確かめる方法が実は現在としてはないのであります」と同じ衆議院外務委員会で破廉恥な答弁をおこなった。東条内閣の商工大臣として中国人労働者強制連行の計画を推進した責任者のひとりでありながら・・・

リュウレンレンの帰国をまじかに日本赤十字の課長が愛知官房長官の代理として、手紙と 10 万円を届けに来た。手紙には「長い間苦勞されたとのことで、誠にお気の毒に存じ

ます。帰国されましたらゆっくり静養され長く元気で暮らされるようお祈りします。」とあった。リュウレンレンは10万円を「我不要（ウォブアーオ）」と叫び拒絶、人としての誇りを傷つける岸内閣の応対に怒りを抑えることはできなかった。

そんなリュウレンレンにとって東京で受けた一番すばらしい贈物、それは妻のチャオユイランと息子が生きているという知らせであった。何時の日か父に会うことのあるように「尋児（シュンアル）、尋ねる子」と名づけられていた。シュンアル、そしてチャオユイラン。リュウレンレンは誰よりも息子シュンアルに会いたかった。リュウレンレンは誰よりも妻チャオユイランに会いたかった。

昭和33年4月、白山丸は一路故国に向かって進んだ。かつては家畜のように船底に積まれてきた海を帰りは特別二等船室の客となって波を踏んで帰る。飛ぶように波を踏んで帰る。なつかしい故郷の山河がみえてくる。長い長い旅路の終り。14年の終着の港、多くの出迎えの人々に囲まれた。別れた時23歳の若妻チャオユイランは37歳になっていた。「おとつあん！」抱きついてきた少年、それこそはシュンアル。髪の毛もつやつやと涼しげな14歳の男の子だった。

3人は荷馬車に乗ってふるさとの草泊（ツアオポ）村に帰った。ふるさとには桃の花ざかり、村びとは銅鑼や太鼓ならしてお祭りのよう。「レンレン兄いが帰ったぞう。」行きあう人のひとり、ひとり、その名を思いおこし、抱きあいながら家に入った。その夜、リュウレンレンとチャオユイランは夜を徹して語りあい、契りあった。一家の悲惨、苦難の年月、再会のよろこびを。少しも損われていなかった田舎訛、山東訛で。あくる朝、窓には新しい窓紙、オンドルには新しい敷物、土間で新しい農具が光っていた。リュウレンレンは畑に飛び出し、ふるさとの黒い土を一すくい舌の先で嘗めてみた。麦は一尺にも伸びて、茫々とどこまでもひろがっている。

時がたち月日が流れ、一人の男はふるさとの村へ遂に帰ることができた。13回の春と13回の夏と、14回の秋と14回の冬に耐えて。穴にもぐって青春をすっかり使い果したのちに帰ってきた。

その後、リュウレンレンは日本政府と企業に対する長い闘いを日中の市民、弁護士の支援を受けて続けていくのでありますが、お時間がやっまいりました。その話はまたの機会にということで、本日のリュウレンレン物語の一節、お粗末ながらこれにて読み終わりと致します。ありがとうございました。